減らせ突然死

AED推進フォーラム
Automated External Defibrillator

2021

5周年記念：
AEDを活かすためのチームワーク

減らせ突然死！ AED
公益財団法人
日本AED財団

減らせ突然死

AED推進フォーラム

Automated External Defibrillator

2021

5周年記念：
AEDを活かすためのチームワーク

2021年12月8日（水）　於 学士会館

ご挨拶

名誉総裁
高円宮妃殿下

新型コロナウイルス感染症の感染拡大により、私たちの生活様式は大きく変わりました。お互いの距離をとる、そしてお互いに触れ合わないといったことが大事とされるコロナ禍で、救急救命の手段としてのAEDの使用が遅れ、救える命が救えなかったかもしれないと考えるのはとても辛いことです。この2年間に皆様方の中にも、ご自身やお近い方が新型コロナウイルスで苦しい思いをされた方もいらっしゃることでしょう。そうした方々に心よりお見舞い申し上げますとともに、全国の医療従事者のご尽力に対して心より敬意を表します。

昨年、本財団の功労賞で優秀賞に輝いた事例がございました。それは小学校5年生の男子が、自身の父親が心停止状態に陥った際にとっさに行動し、妹さんも父親のスマホを操作し、お母様を補助して皆が一つのチームとなって父親の命を守ることができたという事例です。子供がとっさに行動するという力は本当に素晴らしいことと思いますが、それまでのご両親の教育や教育の現場での講習等が活かされたためでしょう。

今年は、学校で先生が子供の命を守る、というこれまでの考え方をくつがえす事例がありました。休日に行われていたバスケットボール部の活動中、突然倒れた先生の命を中学生が救いました。リーダーシップをとる子が存在し、チームワークが構成され、その結果救われた命です。このようにとっさに行動できる力を身につけ、チームワークを構成するためには、学校やスポーツの現場における講習の進め方が大きく関わっています。

安心安全という言葉を最近よく耳にします。どのようにしたら安心安全な社会を作っていけるかを皆で考える中、AEDは心臓が動くか停止するかという神様の領域に人間が関わることができる器具です。一般の人が関わり、失ってしまうかもしれない命を繋ぐことができる奇跡の器具といって差し支えありません。それを皆が使えるようになり、少しでも安心安全な社会にしていきたいものです。

本フォーラムでは、救命に子供たちが関わった事例が２つ報告されました。新型コロナウイルスにより世相が暗くなる中、子供たちの活躍という明るい希望のメッセージを感じとっていただけるものと存じます。

開催にあたって

会長
岡本　保

理事長
三田村 秀雄

新型コロナウィルスの感染拡大はいまだにとどまることを知らず、世界中が混乱している状況です。昨年のAED推進フォーラムは、ビデオ収録による無観客開催となりました。今回はまだ本来の形ではありませんが、何とか対面での開催が実現しましたことを喜ばしく感じています。

2021年に設立から5周年を迎えた日本AED財団は、毎年7万人ともいわれる心臓突然死を防ぐカギとなるAEDと市民の皆様との距離を縮める活動を継続して行って参りました。最近では、目撃された心臓由来の心停止例に、現場に居合わせた市民がAEDを使用すれば半数以上を救うことができるまでになりました。しかし、それでも現場でAEDが使用されるのは20件に1件程度にとどまっています。まだまだAEDはハードルの高い器具であり、普及のために力を尽くしていく必要性を感じます。

今回のAED推進フォーラムのテーマは、「AEDを活かすためのチームワーク」としました。学校、スポーツの現場、街中など様々な場所でのどのような工夫をすればチームワークが構成され、AEDの使用に繋がるのかを発表、議論いただきました。チームワークには、緊急時と平時の2種が存在します。平時にどのような危機対策を考え、シミュレーションを行い、コミュニケーションをとっているかが、緊急時のとっさの連携につながります。そして何よりも大事なのは早期教育と考えています。本フォーラムでは子供たちの活躍が紹介されましたが、子供たちが無駄なく行動できたのは早期教育によりAEDや蘇生術を頭と身体で覚えていたことが大きな要因と思われます。

5周年を迎えてもそれは一つの通過地点に過ぎません。AEDがさらに普及し、躊躇なく使用できる人が増えるまで、本財団は精力的な活動を行って参ります。引き続いてのご支援、ご協力を賜りますよう宜しくお願い申し上げます。

CONTENTS

救急現場でのチームワーク

学校現場におけるチームワーク

《宮崎市立江南小学校の事例》
心臓病管理下の生徒の心停止を救った教師達の準備とチームワーク

◇ 想定外を想定内に ………… 6
三田村 秀雄
(国家公務員共済組合連合会立川病院 顧問 / 元・慶應義塾大学心臓病先進治療学 教授 / 公益財団法人日本AED財団 理事長)

◇ もしもに備えてチーム力を高める ………… 7
吉瀬　恵子
(宮崎市立江南小学校 養護教諭)

《鎌倉市立第一中学校の事例》
休日の学校内で教師の心停止を救った中学生バスケットボール部員達のチームワーク

◇ 行動を可能にしたのは子供の潜在能力と早期救命教育 ………… 8
三田村 秀雄
(国家公務員共済組合連合会立川病院 顧問 / 元・慶應義塾大学心臓病先進治療学 教授 / 公益財団法人日本AED財団 理事長)

◇ もしものときの準備と実行する力 ………… 9
池田　克行
(鎌倉市立第一中学校 校長)

スポーツ観戦現場におけるチームワーク

◇ スポーツ観戦観客席における心停止を救うためのチームワーク ………… 10
本間　洋輔
(千葉市立海浜病院救急科 主任医長 / 特定非営利活動法人ちば救命・AED普及研究会 理事長 / 公益財団法人日本AED財団 減らせ突然死プロジェクト実行委員)

SNSを活用した地域でのチームワーク

◇ 街中で起きた心停止を救うための仕組み作り ………… 12
島本　大也
(京都大学環境安全保健機構 特定助教 / 公益財団法人日本AED財団 減らせ突然死プロジェクト実行委員)

◇ 現場への急行を促すための自治体消防の工夫 ………… 13
糟谷　仁史
(尾張旭市消防本部 消防次長兼消防署長)

◇ AED救命サポーター全国展開を目指して …… 14
石見　拓
（京都大学環境安全保健機構 教授 / 特定非営利活動法人大阪ライフサポート協会 副理事長 / 公益財団法人日本AED財団 専務理事）

追加発言　発信する機会と場を求めて …… 15
有森　裕子
（元・女子マラソン選手 / 公益財団法人日本AED財団 AED大使）

パネルディスカッション …… 16
AEDを活かす － いつでもどこでもチームワーク －

司会　堀　潤
（特定非営利活動法人8bit News 代表 / ジャーナリスト）

ファシリテーター　松岡　康子
（NHK 名古屋放送局 記者 / 公益財団法人日本AED財団 減らせ突然死プロジェクト実行委員）

パネリスト　吉瀬　恵子
（宮崎市立江南小学校 養護教諭）

糟谷　仁史
（尾張旭市消防本部 消防次長兼消防署長）

山本　篤
（プロアスリート / 公益財団法人日本AED財団 AED大使）

喜熨斗智也
（国士舘大学体育学部スポーツ医科学科 准教授 / 公益財団法人日本AED財団 減らせ突然死プロジェクト実行委員）

飯沼　誠司
（アスリートセーブジャパン 代表理事 / 公益財団法人日本AED財団 理事）

2021年度 AED功労賞受賞者および受賞団体 …… 22

減らせ突然死「AED推進フォーラム2021」は、2021年12月8日（水）に学士会館（東京都千代田区）で開催されました。本冊子はその記録集になります。
4部構成で第1部の救急現場でのチームワークは、桐淵博（元・さいたま市教育委員会教育長 / 公益財団法人日本AED財団理事）と副島京子（杏林大学医学部循環器内科教授 / 公益財団法人日本AED財団理事）が、第2部のSNSを活用した地域でのチームワークは、二川一男（元・厚生労働事務次官 / 東レ株式会社社外取締役 / 公益財団法人日本AED財団理事）と武田聡（東京慈恵会医科大学救急医学講座教授 / 愛宕救急医療研究会理事長 / 公益財団法人日本AED財団常務理事）が座長を務めました。

宮崎市立江南小学校の事例

想定外を想定内に

三田村 秀雄
国家公務員共済組合連合会立川病院 顧問
元・慶應義塾大学心臓病先進治療学 教授
公益財団法人日本AED財団 理事長

AEDの導入後、学校における心停止例の救命率が急速に高まっています。それには心停止の瞬間が目撃されやすい、周囲に手を貸せる人が複数いる、そしてAEDが設置されている、という3条件が満たされていることが大きいのですが、それにも増して重要な要素は緊急時のチームワークです。

2020年9月24日、宮崎市立江南小学校6年3組の教室で、昼食後に食器を片付けようとしていた男児が突然倒れました。居合わせた担任の別府先生はすぐに「田上先生、AED」と叫ぶとともに、そばにいた他の生徒に内線電話で職員室に電話をさせました。

叫び声を聞いた1組の久木元先生は駆けつけるやいなや気道確保、特別支援学級の田上先生は119番通報と胸骨圧迫を開始、2組の黒木先生はAEDを取りに校舎の端まで走りました。職員室で連絡を受けた養護教諭の吉瀬先生は、保健室に向かい血圧計とパルスオキシメーターを持って駆け付けました。AEDを受け取った特別支援学級の隅本先生が電気ショックをかけ、しばらくすると男児の目から涙が流れ、一同は安堵しました。

救命を成功に導いたのはとっさの円滑なチームワークでしたが、それをもたらしたのはこの男児に心臓病があるという情報を入学時から教師達が共有し、まさかの時にすぐに行動が取れるように毎年シミュレーションを繰り返していた努力です。想定外とされがちな心停止を想定内にして備えていた教師達の執念が実った瞬間でした。

もしもに備えてチーム力を高める

吉瀬 恵子
宮崎市立江南小学校 養護教諭

忘れもしない2020年9月24日……給食を食べ終えた時でした……「もしも」が起こりました。息を切らしながら私が教室に駆け付けたときには、隈本先生がまさにAEDをケースから取り出すところでした。いつもは子どもたちの声で賑やかな教室がしんと静まりかえる中、「大人用ですか？ 子ども用ですか？」という隈本先生の問いかけに、「大人用で」と返答したのを思い出します。その時、先生方は迷うことなくそれぞれの役割分担を実行しました。そしてすべての力があわさったことで一人の命が救えました。チームで行う重要性を実感した瞬間でした。

私が江南小学校に赴任したのは5年前になります。心停止を起こす可能性のある児童が在籍しているという話を聞きました。前任校では「ASUKAモデル」を参考に「もしも」の備えをしていましたが、実際に児童を目にした時に、従来通りの訓練で果たして行動に移ることができるのだろうか？ という思いに至りました。そこで役割分担などを記したシナリオを作成してシミュレーション訓練を試みることにしました。児童が2年生のときは2年生の教室で、3年生になれば3年生の教室で……当然先生方も変わりますから、その都度シナリオを書き換えてシミュレーションを行ってチーム力を高めていきました。あって欲しくない「もしも」に備えて……。

この事故の後、江南小学校では6年生全員に心肺蘇生の研修を受けさせてから中学に送り出すことにしています。

「もしも」が起こった時に一歩踏み出して命を救う、皆で協力してチームで命を救うことを目標に、職員のみならず子供たちとも一緒にこの活動を継続していきたいと考えています。

鎌倉市立第一中学校の事例

行動を可能にしたのは子供の潜在能力と早期救命教育

三田村 秀雄

団体スポーツにおいてはチームワークが重要視されますが、バスケットボール部の中学生が、自分たちだけで心停止に陥った教師を救うという素晴らしいチームワークを発揮しました。

2021年5月3日、鎌倉市立第一中学校の体育館で男子バスケットボール部の練習中に、指導をしていた顧問の教師が突然倒れました。休日であったために他に大人はいませんでしたが、中学生の部員達は直ちに胸骨圧迫を開始し、また別の部員達は携帯電話を借りに校外まで走り、1年生は救急隊員の進路の確保にあたりました。さらに、体育館内にあったAEDを3年生が持ち出し、電気ショックを2度かけました。通報から12分後、救急隊到着時にはすでに呼吸が回復していました。

大人不在の中、中学生がAEDを使い、部活のチームワークを駆使して救命を成功させたという前例のない画期的事例でしたが、そこには学校教育も影響していました。同校では中学2年生に対する保健体育授業で、救命時を想定した役割分担を決めたシミュレーションを行い、その様子を動画に記録して皆で検討するなど、具体的な訓練を4時間かけて行っていました。それが子供たちの脳裏に焼き付き、とっさの行動を可能にしたのです。子供たちの潜在能力の高さを再認識するとともに、早期救命教育の重要性と有効性が示された出来事でした。

もしものときの準備と実行する力

池田 克行

鎌倉市立第一中学校 校長

2021年5月3日午前……バスケットボールの弾む音と掛け声が響く休日の体育館で、顧問の教師が突然ばたりと倒れました。生徒たちは救命教育を受けていたものの、AEDを詳しくは知らない状態で救命活動を行い教師の命を救いました。後日、救われた教師が礼を述べたところ、生徒たちは「当然のことをしただけ」と返答したそうです。

休みが明け、校内放送で報告をすると、生徒たちは神妙な面持ちで事の次第を聞き、バスケットボール部の活躍に賞賛の声を上げるとともに、教師の体調を気遣っていました。

本校における救命教育は保健分野で、「応急手当と心肺蘇生」をテーマに4時間をかけて「もしも」に備えています。座学の後に役割を決めてシミュレーションを行い、それを撮影して動画編集をしてから発表するという内容です。しかし、そうした教育を受けていても、実際にそうした事態を目の前にしたときに行動することは困難です。

① 自ら考え行動できる生徒

② 自ら学び集団で協同できる生徒

③ 自分と周りを大切にできる生徒

本校の目指す生徒像はこの3つですが、生徒たちはそれをきちんと体現してくれました。今回の出来事で、救命活動は他人ごとではない、我が身のことなのだ、という思いを強く実感したのではないでしょうか？

スポーツ観戦観客席における心停止を救うためのチームワーク

本間 洋輔
千葉市立海浜病院救急科 主任医長
特定非営利活動法人ちば救命・AED普及研究会 理事長
公益財団法人日本AED財団 減らせ突然死プロジェクト実行委員

スポーツ観戦のために競技場に行ったことはありますか？ 日本AED財団をはじめ多くの団体が、スポーツ中の突然死をゼロにするために様々な活動を行っています。しかし、その対象は「スポーツをする人」であって、「スポーツを観戦する人」ではありません。多くの方が集まり、熱狂するスポーツの観客席における心停止への備えはまだ不十分です。そこで、日本AED財団では観客席での突然死をゼロにするために、「RED SEAT」というプロジェクトを進めています。RED SEATとは、観客席で突然の心停止が起きた際に、あらかじめ決められた観客席である「RED SEAT」に座っている救命ボランティアが、迅速にAEDを届けるというシステムです。もともとスポーツ中の突然死をゼロにしたいという高校生の想いから始まり、その想いを大学生がシステム化しました。

その活動は前々回のAED推進フォーラムで優秀賞に選ばれるまでに育っています。さらに社会で取り入れていくために、現在は日本AED財団内のプロジェクトとなり、我々は学生さんと共に活動しています。この1年間で野球、サッカー、ラグビーと3種類のプロスポーツ、5つの競技場で実証実験を行い、取り入れるための課題の解決に努めてきました。そして、ついに2022年12月からジャパンラグビーリーグワンのクボタスピアーズ船橋・東京ベイのホストゲームにおいて取り入れられることが決定しました。チーム、救護を担当する国士舘大学とAED財団のチームワークで、命を救う体制作りを進めています。RED SEATは観客の命を救うにとどまらず、その活動を通して心臓突然死やAEDを身近に感じてもらえることもメリットになっています。スポーツ、そしてスポーツ観戦のための競技場は地域のシンボルです。RED SEATを導入することで、競技場/チーム/地域/観客がチームワークを発揮して命を守る街づくりに繋がるように、さらに取り入れる場を広げていきたいと考えています。

みんなでつくる

AED N@VI

AEDの設置に関するルールは存在しません。

様々な団体や個人が任意で設置していますが、

いざという時のために設置情報を共有することが大切です。

AEDを見つけたら登録！ みんなで正確で新しいAEDマップをつくろう！

心臓突然死
70,000人
以上

救命率
1分経過
約10%減る

心肺蘇生と
AEDで
救命率約5倍

スマートフォンを使って最新のAED設置情報を集める
参加型のプロジェクトです。

↑詳細はこちらから

街中で起きた心停止を救うための仕組み作り

島本 大也

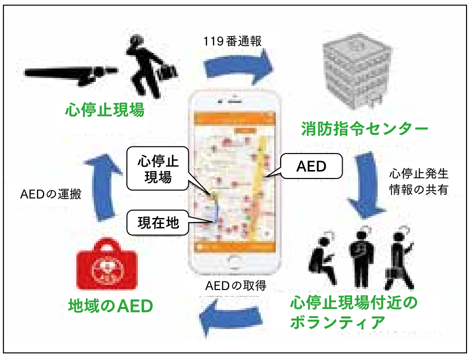
京都大学環境安全保健機構 特定助教
公益財団法人日本AED財団 減らせ突然死プロジェクト実行委員

5.1%。これは心臓が原因で心停止に陥った患者のうち、市民の手でAEDによる電気ショックを受けた割合です。もう少し詳しく説明すると、倒れた瞬間を市民に目撃された事例における割合で、倒れた瞬間を誰にも見られていない症例よりも、AEDが使われる可能性が高いはずの方々における数値です。2004年に一般市民によるAEDの使用が許可されて以降、その割合は年々改善していますが、決して満足の行く数値とはいえません。AED自体の普及は進み、65万台以上が医療機関以外に設置され、その数は増加傾向にあります。また、様々な組織が救命講習会を開催し、毎年300万人以上が受講しています。5.1%は、こうしてAEDとAEDを使える人が増加してきた中での数値です。さらなる改善のためには、これまで実施されてこなかった新しい取り組みが必要です。その一つが、AEDとAEDを使える人をICT（Information and Communication Technology：情報通信技術）を用いて心停止現場につなぐ仕組み「AED GO」です。

AED GOは消防組織の協力によって運営されるシステム（**図**）です。その仕組みは、119番通報を受けた消防が心停止の可能性を察知した際、あらかじめ登録されているボランティアのスマートフォンへ心停止現場と周囲のAED設置場所の情報を届けることで、いち早くAEDを心停止現場へ届けるというものです。このシステムは、現在愛知県尾張旭市および千葉県柏市において実運用されています。まだ救命事例の獲得には至っていませんが、救急隊よりも早くAEDを届けた事例も見られます。同様のシステムはすでに一部の国で取り入れられており、その可能性に期待が集まっています。

AED GOが効果を発揮するためには、システムを導入する自治体と地域住民によるボランテイア参加者との協同が必要です。ボランティアの人数が多ければ多いほど、倒れた人に素早くAEDが届く可能性が高まることはいうまでもありません。

日本の優秀な救急システム・医療システムを用いたとしても、医療従事者のみで今まで以上に心停止患者の救命率を向上させることは困難です。AEDとAEDを使える人をつなぐシステムを用いて、突然の心停止とそれに対する救命の仕組みにあらゆる人々を巻き込み、専門家の垣根を超えたチームワークを形成していくことが必要とされています。AEDの使用率向上、ひいては心停止の救命率改善のために、AED GOの導入・参加・広報へのご協力をお願いいたします。



現場への急行を促すための自治体消防の工夫

糟谷 仁史

尾張旭市消防本部 消防次長兼消防署長

尾張旭市では、平成26年から「あさひAEDサポート事業」と称し、AEDの貸出、管理、登録を行っています。サポート事業の登録制度により、「点」であった施設のみのAEDが「線」となり、地域のAEDとして共有でき、多くの市民が使用可能な環境を整備するに至りました。さらに、夜間に使用できるAEDが少なかったため、市内のコンビニ全店舗にAEDを設置いたしました。この取り組みにより、24時間使用できるAEDは31カ所になりました。

環境整備が整うと同時に、AEDが十分に活用されていないという課題にも直面しました。活用推進を図るため、市の広報誌やホームページ、報道機関への情報提供を行い積極的にアピールしていきました。新聞をはじめとするマスメディアでコンビニエンスストア設置のAEDが取り上げられるようになり、市民の認識は徐々に高まっていきました。そしてこの取り組みを知った京都大学健康科学センターの教授で本財団専務理事の石見氏と、AEDのさらなる使用率の向上を目指すことになりました。その成果が、京都大学と企業が開発した消防指令台とスマートフォンアプリを連携させたAED運搬システム「AED GO」で、平成26年に実証実験を開始しました。

AED GOは、アプリで救助要請を受け、いち早く傷病者のもとへAEDを届けることを目的としています。救命活動を実施する方を救命ボランティアと位置付け、消防職員および消防団員の120名で実証実験を開始し、その後市職員にまで運用を拡大いたしました。そしてさらなる発展を目指し、平成30年にはその対象を市民にまで広げました。現在では380名の救命ボランティアが登録されています。

登録施設の拡充、救命ボランティアの確保など、課題が一つひとつ整理されていく中で、AED GOに期待する効果として、①救命ボランティアの増加に伴い、救急隊が到着する前に現場に駆け付けて救命できること、②AED GOの取り組みを通じて市民へAEDの必要性を広く周知できること、③AEDマップとしても利用できるため市民に有効活用されやすいこと、の3点があげられます。今後の展望として、救命ボランティアの増員およびAED登録施設の増加を図り、市民が安全・安心に暮らせるまちづくりを築いてまいります。

AED 救命サポーター全国展開を目指して

石見　拓

京都大学環境安全保健機構 教授
特定非営利活動法人大阪ライフサポート協会 副理事長
公益財団法人日本AED財団 専務理事

日本では、毎年7万人を超える方が心臓突然死で亡くなっています。突然の心停止からの救命のカギは、心停止の現場に居合わせた市民によるAEDを用いた救命処置の実施になりますが、AEDを用いた電気ショックを受ける例は、いまだ5％に過ぎません。

日本AED財団では、設立以来、AEDの使用率を高め、救いうる命を救うことのできる社会を目指し、様々な取り組みを進めてきました。市民救助者による心肺蘇生（胸骨圧迫）とAEDの使用を増やすための方策として、次の3つがとりわけ重要です。

① 学校教育への導入を柱に救命処置を学ぶ機会を増やすこと

② 心停止に気づいてもらうためのテクノロジーを活用すること

③ 行動を促すとともにサポートを行い市民の救助の障壁を減らして救助意欲を高めること

日本AED財団では、AEDの使用率向上を実現するために、AEDを使って救命に関わりたいという想いを持った市民を支援し、輪を広げることを目的として、AED救命サポーターを普及する取り組みをスタートします！

主な取り組み

● AED救命サポーターの普及

目標登録者：120万人（人口の1％）
- AED救命講習を受講したうえで救命処置への参加意思を表明していただく
- 社会運動化することで救命行為への参加を社会の常識にしていただく

● AED救命サポーターアプリの作成と提供

- アプリを通じて AEDおよび心臓突然死に関する情報を提供する
- 救命事例の共有、サバイバーからのメッセージなど、サポーター間や救命する側と救命された側を繋ぐことで連帯感を強化して救命行動への参加を促進する

● AED救命アプリの機能（案）

- 心停止に遭遇した際の手順の案内
  119番通報ボタン
  一連の流れの解説。動画？ スライド？ AED財団監修で差別化を図る
- AED使用者からの発信
- AED救命サポーター証発行
- AEDを用いた救命処置の解説およびアップデート
- 日本 AED財団からのイベント・キャンペーン情報
- サバイバーや家族、AED使用者、AED大使などからのメッセージを発信
- サポーター間の情報交換掲示板の作成（これは既存のSNSを使う方が良い?）
- AED駆け付けボランティア登録（導入地域のみ）
- AEDマップ　ルート検索機能
- AEDマップ　閲覧と情報更新機能（既存のアプリとの連携）
- AEDマップ　情報の更新への協力（既存のアプリとの連携）
- 楽しみながら AEDおよび救命処置を学ぶゲーミフィケーション（既存のアプリとの連携）

● 主な取り組み、キャンペーン（予定）

- 日本 AED 財団の講習やイベント参加者への参加呼びかけ、チラシ配布
- 救命講習参加者への参加呼びかけ、チラシ配布
- 消防団員への参加呼びかけ
- 学校および教育委員会への参加呼びかけ、チラシ配布
- AEDをもっと身近にキャンペーン：7月1日の「AEDの日」から8月10日「健康ハートの日」において、AED大規模講習やAEDマップ登録・更新イベント
- AEDフォーラム：11月～12月

追加発言

発信する機会と場を求めて

有森 裕子

元・女子マラソン選手
公益財団法人日本AED財団 AED大使

本フォーラムにお集まりの方々は、AEDの重要性を熟知しています。そして、「もしも」が起きた場合に行うべきこと、行わなくてはならないこともよく知っています。ただ、それを発信する場が少ないがために、情報は知っている人のところで止まってしまいます。

知っている人が発信する機会と場を得ること、さらに持続して発信していくことが必要です。では、情報を一定の人のところで情報をとどめないために私たちは何をすればよいのでしょうか？

世の中には数多くのイベントが存在していますが、中でもマラソン大会はAEDの知識の共有と普及に最適です。スポーツであるマラソンでは時としてAEDが必要になりますし、何よりマラソン大会は老若男女が一堂に会するイベントです。こうした場でAEDの重要性を伝えることができたなら、その知名度、必要性は一気に広がることでしょう。半ば強制的にでもそのような場所を作る行動を起こしていくことが私たちには求められています。

AEDを活かす －いつでもどこでもチームワーク－

司　会
堀　　潤
（ほり じゅん）

ファシリテーター
松岡　康子
（まつおか やすこ）

パネリスト
吉瀬　恵子
（きちせ けいこ）

パネリスト
糟谷　仁史
（かすや ひとし）

パネリスト
山本　　篤
（やまもと あつし）

パネリスト
喜熨斗智也
（きのし ともや）

パネリスト
飯沼　誠司
（いいぬま せいじ）

堀　「AEDを活かす－いつでもどこでもチームワーク－」をテーマにパネルディスカッションを始めます。司会は堀が務めさせていただき、ファシリテーターを減らせ突然死プロジェクト実行委員でNHK名古屋放送局記者の松岡康子さんにお願いしています。まず、飯沼さんにお伺いいたします。どのようなことを意識してチームワークを発揮されていますか？

飯沼　AED財団理事でライフセーバーの飯沼です。ライフセーバーの仕事は、チームワークで成り立っています。海水浴場における救護・救助が主な仕事になりますから、自然が相手になります。そのため、同じような事故というのは一切ありません。日々天候を確認しながら、チームで海水浴場のパトロールを行います。メンバーはローテーションしながらのシフト制のためチーム構成は都度変わります。異なるメンバーのスキルを把握しながらチームワークが成り立つように人を配置していきます。例えば、台風が近づいてきて海が荒れそうであれば、スキルの高い人を配置します。さらに、お互いのスキルを知るためのトレーニングを行っておくこともチームワークを発揮するためには重要です。

糟谷　消防関係も同様です。消防のチームワークも強固でなければ目的が達成できません。火事の通報があった時にはポンプ隊だけではなく、状況を確認して重症患者がいそうであれば救急隊も一緒に出動します。現場ではポンプ隊と救急隊とがしっかりと連携して救命活動を行いますが、そのためには日頃から早く病院に搬送できるようにトレーニングをしておく必要があります。

消防だけのチームワークでは救命できませんから、あらかじめ様々な機関とのチームワークづくりもしておかなければなりません。現在最も力を入れているのはそのチームワークの向上です。

堀　吉瀬先生、学校の状況はどのようでしょうか？

吉瀬　学校における私の役割は健康推進になりますが、一人では遂行できません。まず、子供の命を守るのだという思いを一つにして、その思いを教職員が共有することが重要です。そうした思いがチームワークの実践につながっていきます。

堀　救急システムの専門でモバイルAED隊の取り組みもされている喜熨斗さんはどのようにお考えでしょうか?

喜熨斗　突然死プロジェクト実行委員会のスポーツ部会を担当しています。普段は大学で救急救命士を目指す学生を教えています。

東京マラソンをはじめ、年間40ほどのマラソン大会で学生とAEDによる救護活動を行っています。具体的な活動は、学生たちと自転車に乗ってコースを巡回し、何かあれば駆けつけて救命するというものです。一つの命を救うためには、私たちだけの力では不可能です。近くを走っているランナー、給水所のスタッフ、コース上の様々なボランティア、応援している観客、そうした方々が臨時のチームを構成してはじめて一つの命を救うことができます。

多くの人たちが集まる場所は容易に混乱が生じます。重要であるのは大きな声でお願いをすることです。AEDの使用はもちろんですが、前段階として倒れている人が周りの方々の目に触れないような壁を作ることも重要です。協力をしたくないという方は少ないため、とにかく大きな声でお願いをしてください。

堀　プロアスリートの山本さん、よろしくお願いいたします。

山本　AED大使を務めています。個人競技であっても多くの方の支えが必要ですからチームが構成されています。チームワークは、リーダーがどのような振る舞いをするかにかかっています。AEDが必要になった方を目の前にした時にどのように行動できるのかを常に意識しながら、チームにおけるリーダーの役割なども啓発できる活動を行っています。

堀　松岡さん、チームワーク作りに必要な鍵はなんでしょうか?

松岡　先日、駅の構内である取材をしていた際に、突然倒れた方に遭遇しました。思わず駆け寄りましたが、その場にはすでに二人の方が寄り添っていました。119番をしながら「AEDを!」と叫ぶと、そばにいた誰かがすぐに走りだしました。

倒れた方は痙攣を起こしていましたが、おさまった時に息をしているのが確認できました。最初に寄り添っていた二人は、倒れている方の体を横に傾けたり声をかけ続けたりするなどすぐに行動を起こしていました。感動するほどのチームワークが即席で完成していました。

堀　誰が何をすべきか、という役割分担ができていたのですね?

松岡　はい。大きな声で自分が何をします、という意思を伝えることで役割分担がはっきりしてチームワークが形成されました。喜熨斗さんが指摘した「大きな声で伝える」ことは必要な鍵です。

堀　ありがとうございます。私は恵比寿の街中でAEDマップを片手にAEDが設置されている建物を一軒一軒訪ねてみたことがあります。しかし、ホテルに設置されているというので訪ねてみるとホテルマンがいない時間帯でドアが閉じられていて中に入れない、ある歯科医院に設置されているというので訪ねてみると閉院している時間帯で使用できない、という現状に遭遇しました。情報と実際の乖離というもどかしさを感じました。鍵は現状の把握とアナウンス、そして改善していくことだと強く思いました。

実践者の皆さまにお伺いさせていただきます。江南小学校では平時にどんなチーム作り、心構え、準備工夫をしていたのでしょうか?

吉瀬　突然死に関する知識、回避するためのスキルは人によって様々です。教職員であってもかわりません。最も大事なことは、「子供の命を守り育てる」という意識です。「チーム江南」では、子供の命が危機的な状況になった時に、その命を救うために職員一丸となって行動する、という意識を合言葉に実践しています。

その他に大切にしてきたことがあります。一つ目は子供たちの健康状況を共有するために年度当初に顔写真入りの紙を作成し、疾患のある子の状況を全職員で把握する。二つ目はチーム力が高まるような訓練もしくは研修を行う。

三つ目は平素から職員間のコミュニケーション力を高めておく。この三つを実践できるか次第でチーム力は決定します。

堀　言うは易し、行うは難しです。実践できたからこそ説得力をもつコミュニケーション力ですが、どのようなことを心掛けてきたのでしょうか？

吉瀬　難しいことは何一つありません。朝、健康観察をそれぞれのクラスが提出しますが、それを確認して「この子はこの頃風邪による欠席が多いけれど何かあったの？」と担任に聞く、先生たちにも「顔色が悪いけど大丈夫？」というようなごく普通の会話を行うことを心掛ければよいのです。

堀　山本さんはどのようにお考えになりますか？

山本　学校現場では先生方は様々な場所で仕事をしています。普段はクラスにいても、ある時はそうではない。先生方のチームワークを高めていくコツはあるのでしょうか？

吉瀬　リーダーである学年主任に向けた声掛けを中心に意識して行っています。「先生、このようにしたら子供とコミュニケーションがはかれますよ」というような感じですが、私は足しげく学級に出向くようにしています。

松岡　子供たちが第一発見者になることもあります。誰かが倒れていたらどうすべきか、を子供にどのように伝えているのか教えてください。

吉瀬　本校には30名ほどの要管理児童がいます。保護者の許可が必要ですが、「このお友達は大きな病気をもっているから何かあったときにはすぐ知らせてね。知らせるのは隣のクラスの先生でもさらに隣のクラスの先生でも大丈夫だよ」というようなことを、学級担任が指導しています。

飯沼　普段の学校生活とは異なる、例えば水泳の授業なども想定した訓練もしていたのでしょうか？

吉瀬　これまでプールにおける実際のシミュレーションは行っていませんが、運動場型とプール型にわけて、それぞれの場所での対応策を示した文書を作成しています。

山本　AEDをプールの現場で使おうと思った時に、濡れている身体にパットを貼り付けてもよいのでしょうか？

飯沼　接着面になる箇所はしっかり拭く必要があります。海水浴場ではタオルとセットにして置いておきます。スーパーなどでも使う籠を用意して、AEDのほかにタオル、毛布、救急セットを、さらにウェットスーツを切るためのはさみも一緒にしています。ただし、砂がついた手でAEDのパットを触ってはいけませんから、手を地面につけないようにして救護を行います。コロナ禍では感染防止用のグローブも必要になりますから、学校現場にも置いておくとよいのではないでしょうか。

堀　具体的な対処方法が可視化されてきました。

飯沼　ライフセーバーの世界大会があります。プールの中で行う2分間の競技で、シミュレーテッド・エマージェンシー・レスポンス・コンペティション（Simulated Emergency Response Competition）と呼ばれています。4名1チームで様々なケースの対処法を競います。

例えば、プールサイドで倒れている人、プールサイドで酔っぱらって暴れている人、喧嘩している人、水の中に沈んでいる人、溺れているふりをしている人など様々なケースを、答えを知らない状態で2分間競います。リーダーが誰であるかを明確にしておかないと減点、実際に泳いでいる方にゴーグルを借りて水中捜査をしたり、その場にいる人にAED使えますかとか？と聞いたりして周りを巻き込むことができれば加点、というような具合です。

ライフセーバーだけで完結するのではなく、リーダーがリーダーシップをとりながらどれだけ周りを巻き込みながら的確に指示をだしていけるかを競います。ライフセーバーの迅速さと正確性が問われる競技ですが、このようなシミュレーションテストも学校で広がっていくとよいのではないでしょうか。

堀　救急の現場ではいかにチーム力を高めていくかという心づもりを持っていることが必要とわかりました。

飯沼　テストは今まで実践できてなかった自分に出会うための手段です。以前、学校の先生方に行っていただきましたが、AED使えると思っていたけれども実際は使用できなかったという例が多く見受けられました。テストでは動けなくても、テストを行ったことで見直しをして、いざという時に動けるようになればよいのです。

松岡　海水浴場などで、素人が助けにいって一緒に溺れてしまうというケースがあります。私たちはどこまでかかわっていけばよいのでしょうか？

飯沼　溺れている子供を助けにいっても4割は失敗する、というデータがあります。二重事故になるケースも多いため、水に入るだけでもリスクだ、ということは伝えています。

　水に浮く物を投げるとか、子供だけの場合は大人を呼ぶ、という教育も重要です。ライフセーバーであっても浮く物がないと溺者にコンタクトするのは危険です。絶対にしてはならない、と教育しています。

堀　海水浴場では、どの場所で救急事態が発生したかを特定して伝えることは困難です。どのように対処すればよいのでしょうか？

糟谷　おっしゃる通り特定は難しいというのが現状です。救急車をどこまで寄せていくべきなのか？ 遠くに止めれば患者さんを救急車に収容するまでに時間を要します。

　例えばゴルフ場の救急要請というものがあります。コース上で利用者が直接救助要請をしてくると、大変困惑します。迅速に対応するためには、あらかじめゴルフ場の関係者と連絡体制をとれるようにし、救急車が入るゲートやコース上までの案内ができるようにしておくと良いでしょう。コースをまたぐ場合はプレイを止める、止めたうえで救急車を優先させる、ということもシステム化しています。ゴルフ場の関係者と119番を受けるオペレーター、現場に向かう救急隊、これも一つのチームといって差し支えありません。

堀　事前にしっかり協議してシステム化しておかないときちんと対応できないということですね？

飯沼　このような場合は誘導を行う人がキーパーソンになります。学校であれば先生が、海水浴場であればライフセーバーがその役割を担うと思いますが、場合によっては一般の人に任せなくてはならないこともあります。そのあたりの連携をきちんとするためにもシステム化しておくとよいでしょう。

堀　スポーツイベントの現場も同様と思いますが、東京マラソンのような大規模イベントにおける連携方法を教えてください。

喜熨斗　東京マラソンでは150台のAEDをコース上に設置します。加えて、救急車、救護スタッフ、ランドクターと呼ばれるコース上を走る医師、私たちモバイルAED隊がもしもに備えます。モバイルAED隊は自転車に乗って巡回するチームですが、さらにBLS（Basic Life Support）隊という救急救命を目指す学生やAEDの企業の社員が500メートルごとにAEDを持って待機します。AEDを持っているというPRも重要です。

　東京マラソンの救命事例の中で記憶にとどめているのが2007年の最初の大会です。後半40キロ地点であるランナーが倒れましたが、近くを走っていたランナーがすぐに心肺蘇生を行いました。モバイル隊がまだ到着していなかったためにAEDは現場にありませんでしたが、コース上で応援をしていた小学生がモバイル隊を呼びに駆けつけました。偶然、夏休みの自由研究でAEDの勉強をしていたようですが、応援をしている時に自転車に乗ったカラフルな恰好をしているAED隊に興味をもち、「何をしているの？」と声を掛けたそうです。リュックの中にはAEDが入っていて、いざという時のためにコースを回っているという会話をしていたそうです。この事例は、救護チームのみで計画を立てるのではなく、参加者に広く知ってもらう必要性を示しています。

山本　雑踏の中で倒れた場所を特定するのは困難です。具体的にはどのような手段をとっているのでしょうか？

喜熨斗　救護チームにGPSを持たせたり、リアルタイムで通信できるカメラを持たせるなどをしていますが、人からの情報が確実です。マラソンの場合は何キロ地点という案内がコース上に掲げられています。情報を頼りにその地点の近くにいる救護チームが向かいます。そうした情報はランナーから寄せられるケースが多いため、大きな声で知らせることが重要です。

堀　一斉に119番をしてしまう、という事態も起こりそうですね?

喜熨斗　その通りです。ただ、消防機関で情報統制をしていますから、何台も救急車が出動するという事態はない仕組みになっています。しかし救護チームが到着したことが落とし穴になった事例があります。救護チームが到着したにもかかわらず何分たっても救急車が来なかったため確認すると、誰も救急車を呼んでいませんでした。救護チームが来た時点で救急車が呼ばれていると思いこんでいたのです。「救急車を呼んでください」「救急車を呼びました」、という確認作業が非常に重要と痛感した事例です。

糟谷　催事の関係者が消防機関に通報する場合は、通報の内容が整理されていると対応が早くなります。通報内容が同一であるのか、異なるのかについてオペレーターは入念に確認してから出動指令を出します。同時に複数で起きている可能性も否定できないためです。共通のキーワードのようなものをあらかじめ作っておくとよいでしょう。

吉瀬　学校でマラソン大会を行う場合についてアドバイスをいただけませんか? 事前にAEDをどの程度借りておくべきなのか、限られている職員をどのように配置したらよいのかなど、迷います。

喜熨斗　自転車に乗ってAEDを運ぶ時、3分以内にAEDを使うためにはどれくらいの間隔で配置する必要があるのか、という研究をしたことがあります。おおよそ1.2キロから1.5キロ間隔で配置すると3分以内に到着できるという計算になりました。ただ、それだけの台数を集めるのは現実的ではありません。距離が必要な場合は、同じコースを周回させるようにするなどの工夫もしてみてください。

事前の計画がとにかく重要です。ランナーが最初に発見する可能性が高いため、「参加する学生も含めて一つのチーム」、という計画を作ることです。日本AED財団のホームページには学校現場におけるEAP(Emergency Action Plan)、スポーツ現場におけるEAPを掲載しています。緊急時における行動計画例になりますので参考にしてください。

堀　街中で倒れている人がいた場合にAEDを使うべきかの判断はどのようにしたらよいのでしょうか?

喜熨斗　AEDを使うべきなのか迷いやすいですが、「迷ったら使え」です。電気ショックが必要かそうでないかはAEDが判断します。

松岡　私はすごく単純に考えています。倒れている人に声掛けをして反応しなければAED、という考え方です。呼吸の状態ではなく、会話ができるかできないかで判断してもよいのでしょうか?

喜熨斗　マラソン大会などで「人が倒れている」、という情報が入った際には必ず「会話のできる状態ですか?」と聞きます。会話ができなければAEDを準備してください、と伝えますので正しい判断です。

堀　「会話できますか」「救急車呼んだ方はいますか」と聞く。声掛けの重要性がよくわかります。

山本　AEDに判断を任せる、は新鮮です。AEDは医療機器、という認識が強いため一般の人はどうしたら使えるのか、と難しく考えがちです。AEDを開ければ、答えは中にあります。誰にでもわかるように説明されています。「使用するにあたり難しいことは何一つありません」ということを周知徹底していくと、世の中の認識が変わっていくはずです。

堀　倒れている人が女性であったためにAEDが使いにくかったという事例がありました。具体的に改善していくためにはどのようにしたらよいのでしょうか？

松岡　私が取材したケースをご紹介します。あるマラソン大会で女性ランナーがゴール手前で倒れたため、近くにいた女性が心臓マッサージを始めました。大会関係者が救護車に乗って駆けつけて119番を行いましたが、救護車に搭載されていたAEDが使われることはなく、救急車が到着するまで電気ショックは行われませんでした。その女性は重い脳障害を負い、自立した生活が困難な状態です。ご家族によると大会関係者は女性だから使わなかったと話したそうで、とても残念な事例です。

堀　日頃からの意識づけ、訓練、講習会のあり方が問われそうです。

糟谷　女性が倒れている場合、多くの人に集まってもらい、後ろ向きに囲ってください。そうすることで外部の人から見ることはできなくなります。多くの人が集まれば何かしらの対策を講じることが可能ですから、講習会では大きな声で人を呼ぶように、と教えています。

松岡　女性にAEDを使用する場合、「下着の隙間から差し込むようにしてもAEDのパットを貼りつけることができます」という実際も広く知っていただく必要があります。全部脱いだ状態でなければと使用できない、と思っている方も多くいらっしゃいます。

喜熨斗　自分で判断できない場合、消防に通報するとそのままスピーカーホンで救急車が到着するまで現場の状況を伝えられ、かつ指示を仰げるということも知っていただきたいと思います。

糟谷　心肺停止やそれに近い場合、救急車が到着するまでオペレーターが処置の助言をします。到着してから素早く救命活動に入るために、救急隊からも傷病者宅にコールバックして状況把握に努めることもあります。

堀　様々な取り組みが見えてきました。今日参加されてあらためていかがでしたか？

山本　AEDがどこにあるのかをアプリで広げていければよいですね。あってもビルが閉まっている、というようなことがありますから何時から何時は大丈夫、という情報もあわせておくことが大切です。このような情報を簡単に入手できる仕組みづくりが、チームワークにつながっていくのかもしれません。

松岡　今回のフォラーラムを通して子供の力もすごく大きいとわかりました。学んだことをすぐに実践できるというのは印象的です。

堀　AEDを活かすために重要なのは「いつでもどこでもチームワーク」です。知らない人同士であってもチームワークが成り立つこともわかりました。
本日はありがとうございました。

一同　ありがとうございました。

2021年度 AED功労賞受賞者および受賞団体

◆ 最優秀賞

発達段階に応じた救命教育プロジェクト

受賞者：Teamいばらき 発達段階に応じた救命教育プロジェクト（教職員有志）

若い世代に救命教育を行うことの重要性を考える有志のメンバー約30名で、茨城県の幼児・児童・生徒のそれぞれの年代を対象に学習指導案を作成し、指導の実践を行った。指導案作成にあたり全校種共通で次の3項を大切な視点として捉えた。

①主体的・対話的で深い学びを実現すること
②発達段階に応じた内容で系統的な学びとなること
③どの地域でも実践可能なこと

◆ 優秀賞

inochi Gakusei Innovators' Program 2021 KANAZAWA
突然死の悲しみのない未来を創るために

受賞者：inochi Gakusei Innovators' Program 2021 KANAZAWA

心臓突然死の問題の解決の鍵は市民の行動変容である。本プロジェクトでは、大学生が高校生に命を救うということの理解を促し、課題解決策を一緒に考え、討議するというアプローチを介して、まず若者の意識、それに続いて金沢市民の意識並びに行動の変容を目指した。高校生と大学生、大学教員が関わる課題解決プロジェクトを考え実行した。

◆ 優秀賞

中学生が教師を救う

受賞者：神奈川県鎌倉市立第一中学校　男子バスケットボール部

男子バスケットボール部が体育館で練習をしていた際に顧問が心肺停止状態になった。大人不在の中、生徒たちだけで心肺蘇生、119番通報、AEDの調達と電気ショックにあたり、10数分後に到着した救急隊員に引き渡し、救命につながった。救命授業の受講に加え、とっさの勇気、機転、実行力が成功に貢献した。中学生たちの力と学校教育の重要性が示された。

受賞者には賞状と副賞として以下が授与された。（　）内は提供企業・団体。

【最優秀賞】 EOS Kiss M2　EF-M15-45　IS STMレンズキット　（キヤノン株式会社）
ネックマッサージャHM-150-BW　（オムロン ヘルスケア株式会社）
サランラップ　バラエティーセット25　（旭化成ゾールメディカル株式会社）
PUSH & AED体験セット　（公益財団法人日本AED財団）

【優 秀 賞】 ミニフォトプリンターiNSPiC PV-123　（キヤノンマーケティングジャパン株式会社）
音波式電動歯ブラシ 充電式　HT-B318-W　（オムロン ヘルスケア株式会社）
ブリーズマスク　ブラック & サクラピンク　（株式会社フィリップス・ジャパン）
PUSH & AED体験セット　（公益財団法人日本AED財団）

後援団体

厚生労働省
総務省消防庁
文部科学省
公益社団法人日本医師会
公益財団法人日本スポーツ協会
日本赤十字社

協賛企業

旭化成ゾールメディカル株式会社
オムロン ヘルスケア株式会社
キヤノン株式会社
キヤノンマーケティングジャパン株式会社
株式会社 CU（CU Corporation）
日本光電工業株式会社
日本ストライカー株式会社
株式会社フィリップス・ジャパン
日本ライフライン株式会社
森ビル株式会社

減らせ突然死 AED推進フォーラム2021

5周年記念：AEDを活かすためのチームワーク

発　行　2022年 2月

発行所　公益財団法人日本AED財団

〒101-0047 東京都千代田区内神田2丁目7-13 山手ビル3号館1階

TEL 03-3253-2111　FAX 03-3253-2119

URL https://aed-zaidan.jp

AED どこに ある？

AEDによる救命処置は、
一刻を争います。
いざという時、すぐに使
えるよう、AEDの設置
場所を普段から把握して
おきましょう。

減らせ突然死！
公益財団法人
日本AED財団